
もしも小鳩に恋人がいたら…

A→S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも小鳩に恋人がいたら…

【Nコード】

N7008X

【作者名】

A↓S

【あらすじ】

小鷹が父と電話している時に「小鳩恋人ができた」と嘘をついていたが、もしも小鳩に恋人がいたら…という話。これは作者の衝動書きです。更新は不定期になりそうです。

ぷろろろ

「ヒッグ…グッス…あんちゃん…どこ…ヒッグ…」

夕暮れがもう沈み始めた頃、少女は泣いていた。

「どうかしたの？」

「ふえ？」

この出会いが羽瀬川小鳩と長瀬遥の出会いである。

「なつかしいな…」

朝日が部屋の窓から光が射し込み、俺こと長瀬遥は目を覚ました。

まだ、瞼が重い。

遥は窓のから射し込んでいる朝日の日差しを見てみるとまだ光が弱かったので、5時過ぎを過ぎたぐらいか…と思い二度寝することにした。

体を少し動かそうと思ったら、右側から何かに体を固定されているように動けなかった…

なんだ？っと思う。

まだ瞼が重い中、右側を見ていると、美少女が遥の体を密着しながら眠っていた。

美少女は、色白の肌に綺麗な金髪をした西洋系の容姿をしていた。その少女の名は羽瀬川小鳩。

そういえば、小鳩のうちに泊まったんだっけ。と遥は思う。

もうわかると思うが、遥と寝ている美少女の小鳩は恋人同士だ。

うーん、小鳩が密着しすぎて、体が動かないや…ならそのまま寝よう。

遥は逆に小鳩の脇の下から腕を背中から回し、密着させた。

女性特有のいいにおいが遥の鼻を刺激する。

いい匂いだな…ZZZZZZZZ

こうして遥の瞼はシャットダウンした。

せつてゝい（前書き）

設定なりけり。

せつてゝい

長瀬遙

私立星クロニカ学園の中学二年生

黒髪でウルフカット

顔は整っており上の中ぐらい

勉強は中の上ぐらい スポーツはバスケットやサッカーなどが得意。

また、学校ではバンドのボーカルを担当しており、とても上手。

そのため、中学校では結構人気がある。

羽瀬川小鳩

私立星クロニカ学園の中学二年生

色白の肌に綺麗な金髪とブルーの瞳を見つ西洋系の女の子なのだが
残念な中二病患者である。

学校ではファンクラブができるほど人気者だがとても人見知りで、
学校では遥ぐらいしか話さない。

羽瀬川小鷹

私立星クロニカ学園に在学中の高校二年

小鳩のお兄さん

髪の毛がところどころこげ茶色っぽい毛が混じっており、くすんだ感じのする鈍い金色なので初見の人が見たら不良と思われる。

友達が少ない。

せつてゝい（後書き）

設定はオリキャラが出るたびに更新予定

はる×こば（前書き）

感想ありがとうございます!!

とても励みになります!!

それではどうぞ!

はる×こば

ジリジリジリジリ

時計のタイマーの音が部屋に鳴り響く。

うーん…

俺こと長瀬遥は枕元にある時計を止め、意識を覚醒させる。

ふぁーあ、よく寝たなぁー、時間は7時半か…小鷹さんがもう朝食作ってるだろうしな…

そう思い、俺は右側に寝ている小鳩を起こそうと思った。

相変わらず、すごい寝間着だよな…

小鳩は黒のネグリジェを着けているが、ネグリジェはお腹までめくりあがってパンツが丸見えになっている。

俺に対してフレンドリーなのはいいけど、やっぱりなぁ…なんつうか、俺も思春期真っ盛りであって…まあ、しないけどさ。しょうがない、お嬢様を起こしましょうかね…

「小鳩、朝だよ」

「……ん……はる…そこはダメじゃき／＼／＼…」

「おまえ…なんつう夢を見てるんだ（汗）」

「ほら、小鳩！」

「んゝん」

結構しぶといなあ…しょうがない奥の手を使うか…

俺は小鳩の耳元に口を近づけ、

「起きてくれたら、おはようのキスしてあげるよ」と小声で言う。

するとどうだろう

ガバッ！！っと小鳩はすぐに起きた

起きるのはやっ！！と思いつつも、

「小鳩、もう小鷹さんが朝食作ってるはずだから、いこ？」

そして、ベットから離れようとした瞬間

後ろからTシャツが引つ張られた…

後ろを振り向くと、ベットに座りながら、頬を赤く染め、ブルーの瞳で上目使いでこちらを見ていた。

「おは…ようの…キ…スは／／／」

う…まさか本気にしているとは…仕方がない…

「おはよう、小鳩」

唇にキスをした。

「おはよう／＼、はる」

「ほら、いこ？」

「ククク、少し待つのじゃ、我が伴侶よ」

小鳩はベットの下に置いてあった、ウサギの人形を手を取った。

「それでは、行きましょうか。高貴なる闇の王、レイシス。ヴィ。フェリシテイ・スメラギ様」

「うむ」

そう言って、俺たちは部屋を出た。

余談だが、おはようのキスはとても柔らかかった。

はる×こば（後書き）

甘々な小説にしたいなゝ

おはよう

「おはようございます」

「おはよう、我が眷属よ…」

「おう、おはよう」

小鳩と一緒に小鳩の部屋から出て、朝食を作っていた小鷹さんに挨拶をした。

羽瀬川小鷹さん

小鳩のお兄さんだが、髪がまるで市販のスプレーで染めたような金髪をしており、目つきが悪く初めて小鷹さんを見たら、絶対に不良と間違われてしまうだろう。

だが、接してみるととてもいい人である。

「すみません。休日なのに…ホントはゆっくりしたかったんじや…」

「いや、別に気にすんなよ。いつもこの時間に作ってるからついでだ」

「ありがとうございます」

「おう」

俺は小鷹さんにお礼を言う。小鷹さんもそう返事をしてくれた。

「ククク、それで我が眷属よ、今日の生贄はなんだ…」

「朝は和食だ。昼にはどんこつラーメンにする予定だ」

「どんこつラーメン!!!」

「にんにくたっぷりだぜ」

小鳩はどんこつラーメンに反応した。

そういえば、にんにくたっぷりのどんこつラーメンが大好きだったね…そう思っていると

「遥も昼食一緒に食べるだろ？」

「えっ…いや…さすがに…昼食までは…」

「遠慮するなよ。一緒に食べようぜ」

「ククク、そうだぞ…」

小鷹さんと小鳩も言うが、さすがに昨日と今日お世話になってるし、さすがに申し訳ない…

「さすがに…!!!」

さすがに断ろうと思って小鷹さんと小鳩を視野に入れて言おうと思ったが、

「ヒッ…グスッ…」

小鳩さん！！！！！なんで泣いてるんですか！！！！！！

「ヒッ：グッ、一緒に：食べ：」

「一緒に食べさせていただきます！！！」

即座に小鷹さんい向かってハッキリと言った。

げくむ(前書き)

難産で駄文：

ラブ要素ぜんぜんない：

これはアカン！！

げむ

朝食を食べ終えた後、また小鳩の部屋に戻った。

「小鳩く暇になったけど、どうする？」

「…ククク…、我が伴侶よ。我がそのような愚策をすると思うか？」

「それで？なにをするの？」

「それは、これだ」

小鳩はP S 2のゲームカセットを見せつけてきた。

「えーと…鉄くろがねの死霊術師ネクロマンサー？？」

「ククク…そうだ。このゲームで遊ぼうぞ」

小鳩はP S 2にセットし。P S 2を起動した。

OPとかを見してみると、その鉄の死霊術師たちのキャラたちが出ていた。

C Gとかムービー技術がとても高く、OPだけでクオリティが高く感じた。

「ククク…我たちがやるのは、この対戦プレイだ…」

どうやらこのゲームは対戦プレイもできるらしい…

「ククク…、我はこのゲルニカを使おうか…」

「ん…：俺はこのキャラル使ってみようかな」

「それでは、始めるぞ、伴侶よ…」

「いいよ」

そうしてゲームが始まった…

やはり最初は小鳩にボコボコにされた。

でもだんだん操作が慣れてきて、後半になると小鳩といい勝負をしながらもなんとか小鳩と勝つことができた。

「ククク…我の本当の力はこのようなものではない…術式解除!!」

「?..?..?」

横で小鳩が言っていたがよくわからない言葉を言っていた。

そうして、もう一度プレイをしてみると…

「!!..!!」

先ほどとは全く違う動きをしてきた。

小鳩のやつ、自分で縛ってたな……！！

そう思いながら、術式解除した小鳩と勝負したがまたもやボコボコにされた。

「くっ…そう…」

「ククク…我を術式解除まで行かせたのは褒めてやろう…だが、まだ甘かったな…」

「ちえ…ん？小鳩もう十二時だぜ、リビングに行こう」

俺は逃げるように言葉を言い、リビングに向かった。

リビングに行くと、小鷹さんが昼食であるどんこつラーメンを準備していた。

「おう、もう昼食できてるぜ」

「すみません、ごちそうになります」

「どんこつラーメンじゃ……！！」

「それじゃ」

「」「いただきます」「」

そのあとは、また小鳩に挑戦したがまたもやボコボコにされて、家に帰宅した…

俺って対戦ゲーム苦手かも…

まりあ

どうしてこうなった…

「むう〜」

「にいちゃん〜」

小鳩は頬を膨らませて拗ねてるし、マリアに匂いを嗅ぐように抱きついてるし…

時間は戻ること、ほんの数分前…

今日の授業を終え、今は小鳩と帰宅している時だった。

その時だった

「にいちゃん〜」

前からだいたい10歳ぐらいのきれいな銀髪の子供のシスターの恰好をした子が俺に突進してきた

「おわっ…っ」と

俺は突進を耐えた。

「ぬぬぬ！忌まわしき神の使徒…」

「にちゃん久しぶり！！あっ！！ウンコ吸血鬼！なんでいるのだ！！」

「それはこっちのセリフじゃ！なんでおまえがいるんじゃ！！」

「ふふーん、散歩していたら前に、にちゃんがいたから来た！」

「グヌヌヌ…」

小鳩は口を噛みしめながら言う。

そもそも、俺とマリアの関係は俺が休日散歩して、マリアがベンチでグッタリしたところを丁度よく持っていたお菓子とかをあげたら懐いた。

前に小鳩と歩いて帰っているときもマリアと会った。

小鳩はとても人見知りだからすぐに帰るつもりだったけど、驚いたことに顔見知りだった。

理由を聞いたところ、小鷹さんの部活の顧問らしい。マリアこう見えて先生だからな…聞いたときマジビックリしたのを覚えている…

「さっさと帰れ、ウンコマリア！今ハルと帰るところなんじゃ！！」

「えへへへにちゃんの匂いだ」

だが、小鳩の言葉をマリアには届いてはいなかった：

「グヌヌヌ…」

「あっ…しまった！ばぁにお使い頼まれているんだった！！それじゃ、バイバイ！にちゃん！ウンコ吸血鬼！」

「ばいばい、マリア」

「ふん…！！」

マリアは大きく手を振りながら去って行った。

相変わらず、明るい子だなあ…っと思う。

マリアを見送りながらそう思っていると、横から小鳩が腕にギュッと抱きついてきた。

「うん？」

「やっと邪魔者消えたじゃき…」

小鳩はマリア以上に抱きつきながらそう呟いた。

可愛いお姫様だね…まったく…

そのまま、俺たちは寄り添いながら夕陽が周りを照らすなかを帰っていた。

まりあ（後書き）

俺的小鳩って独占欲って強い気がするんだよねあゝ

勝手なイメージだけどWW

感想待ってます！

あと、もつとらぶらぶイチャイチャの話にしたいんですが、どうも作者は妄想ができずに困っているの、アイディアがあつたらぜひください！

それではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7008x/>

もしも小鳩に恋人がいたら…

2011年11月1日13時18分発行